

# アンケート調査から見た海外短期研修の意義と今後の課題

## Significance of Short-term Study Abroad Program and Future Issues from Questionnaire Surveys

松浦 康之<sup>1</sup> 鈴木 辰一<sup>2</sup> 長谷川 旭<sup>1</sup> 藤田 怜史<sup>2</sup>  
MATSUURA Yasuyuki<sup>1</sup> SUZUKI Shinichi<sup>2</sup> HASEGAWA Akira<sup>1</sup> FUJITA Satoshi<sup>2</sup>  
<sup>1</sup>国際文化学科 <sup>2</sup>英語英文学科

### Abstract

This paper argues the significance and issues to be considered in the Short-term Study Abroad Program, analyzing the results of the students' questionnaire surveys undertaken before and after the program. The first part presents the history and outline of this program. The second part discusses the questionnaire survey results, showing that this program meets students' expectations concerning experience and skill acquisition, while the results reveal the necessity of pre/post sessions. This paper provides evidence that the Short-term Study Abroad Program takes a very significant part in the curriculum of both the Department of English and the Department of Cross Cultural Studies, concluding with suggestions, such as incorporating pre/post sessions and opportunities to talk with people working abroad, to the future development of the program.

Keywords：海外研修、国際交流、短期研修、異文化交流、学習意欲、語学教育

### 1. はじめに

2020 年、新型コロナウイルス感染症（以下「COVID-19」とする）の爆発的な蔓延により、日本をはじめ、世界中の教育機関が教室での対面授業からパソコンやスマートフォンなどの通信デバイスを介したオンライン授業への転換を強いられることとなった。それだけでなく、交換留学などのさまざまな国際交流関係事業が中止となり、筆者らが所属している岐阜市立女子短期大学においても、交換留学や海外短期研修の中止を余儀なくされた。その中で、オンラインによる国際交流など新たな試みも行われてきた（今・松浦・小森 2021a、今・松浦・小森 2021b）。2022 年も COVID-19 の影響はあるが、各国の水際対策が徐々に緩和されるなど、COVID-19 以前の日常に近づきつつある。

このような状況下で、学生に海外の文化や外国語に触れる機会を模索する中、アメリカ合衆国においては、外務省が発出している感染症危険情報が 2022 年 5 月末の時点でレベル 1 になり、岐阜市立女子短期大学が規定する海外渡航可能条件に適合した。これらの状況を勘案した結果、2022 年度は、英語英文学科と国際文化学科の合同で、「海外英語演習（英語英文学科、2 単位）」および「海外言語・文化演習（英語圏）（国際文化学科、1 単位）」（以下、両演習を合わせて、「アメリカ研修」とする）を約 2 週間（2022 年 9 月 1 日～9 月 15 日）、アメリカ合衆国・カリフォルニア州において実施するに至った。また、アメリカ研修の利点と課題を今後に生かすために、同研修前後にアンケート調査を実施した。

2023 年度の学科再編により、英語英文学科と国際文化学科の 2 学科は国際コミュニケーション学科の 1 学科になる。2022 年度は節目の年であり、ここでこれまでの海外短期研修の総括として調査を行うことは、2023 年度から新たな形で実施される「海外演習（海外言語・文化演習（英語圏）」のより良いあり方を検討する良い機会となる。

本論文はアメリカ研修の実施内容と、同研修前後に行ったアンケート結果をもとに、大学生の異文化理解や国際交流における学習意欲に関する考察を行い、今後の課題と展望を提示する。

### 2. アメリカ研修

#### 2-1. 研修に至る経緯

本学において、夏期休業期間を利用した「海外英語演習」科目は、1992 年度に始まった。最初の研修先はアメリカ合衆国オハイオ州シンシナティ市にあるトマス・モア大学であった。その研修における学生の反応や、教育効果については、山本と吉田が 3 年間に渡りアンケート調査を実施し（1992 年度～94 年度）、本学の『研究紀要』において、2 編に分けて報告している（山本・吉田 1993、吉田・山本 1994）。「海外英語演習」開始後ということもあり、研修プログラムの改善について、踏み込んだ考察は見られないが、この 2 編の報告書からは、開始当初から、参加学生の満足度が高かったことがうかがえる。

トマス・モア大学への「海外英語演習」は 2002 年度までの 11 回行われた。その後、本科目は、ハワイ大学カピ

オラニ・コミュニティ・カレッジ（2003～04 年度）、カリフォルニア州立大学サンマルコス校（2005～17 年度）での実施を経て、2018 年度よりカリフォルニア州立大学ロングビーチ校（2020～2021 年度は COVID-19 のため中止）で実施されている。

本学の紀要において、「海外英語演習」の実施をめぐっては 4 編の報告があるが（山本・吉田 1993、吉田・山本 1994、吉田・山本 2003、山本・吉田 2004）、山本・吉田 1993 と吉田・山本 1994 において実施初年度より 3 年間に渡る参加学生へのアンケート調査結果が報告されているのみであり、その効果の測定や、改善策の提示を目的とした報告は、これまでのところ行われていない。

一方、国際文化学科における海外研修科目は 2000 年度に新規に設置され、「海外言語・文化演習（英語圏）」のみならず、「海外言語・文化演習（韓国）」、「海外言語・文化演習（中国語圏）」が開講されているが、アンケート調査による報告は見当たらなかった。

また、英語英文学科の「海外英語演習」は約 2 週間の研修期間であるが、国際文化学科の各「海外言語・文化演習」は、8 日～10 日間程度で実施されている。そのため、英語英文学科の「海外英語演習」は 2 単位、国際文化学科の各「海外言語・文化演習」は 1 単位になっている。今回、英語英文学科・国際文化学科合同でのアメリカ研修を行ったが、これらの科目設計の違いから、単位数の相違が生じた。この点については、国際文化学科の参加者の一部からも同一の研修を行うにも拘らず、単位数が異なることについての疑問が出たが、入学時の学修規定が適用されるため、丁寧な説明を行い、理解を得られるよう努力した。

## 2-2. 研修概要

アメリカ研修は、カリフォルニア州立大学ロングビーチ校での講義を通して英語力を強化すること、大学で同年代の学生と英語で交流し異文化の理解や学習意欲を向上させること、ホームステイなどを通じて、文化や社会に関する知識を身につけることを目的としている。2022 年 5 月～6 月にかけて募集を行い、英語英文学科からは 10 名（1 年生：7 名、2 年生：3 名）、国際文化学科からは 14 名（1 年生：6 名、2 年生：8 名）の計 24 名が参加した。アメリカ研修の日程概要を表 1 に、授業風景の様子を図 1 に示す。当初、日本語クラスがある高校への訪問が予定されていたが、COVID-19 の影響とともに、スケジュール等が合わず、大学内での授業等に切り替わっている。クラス分けテストについても、当初ネット上で事前に行う予定であったが、連絡ミスなどで実施できず、機械的に 2 クラスに分けた。また、今回は COVID-19 の中でのアメリカ研修の実施とな

ったため、感染症対策および健康管理を入念に行った。

事前アンケートでは、これまでの渡航経験や、外国語学習に関するモチベーション、今回のアメリカ研修で期待しているテーマなどを質問した。事後アンケートでは、自国やアメリカに関する知識の変化や外国語学習に関するモチベーションの変化、今回のアメリカ研修で興味深かったテーマなどを質問した。

表 1. アメリカ研修日程

日程	概要
9 月 1 日	アメリカ到着、各ホームステイ先へ移動
9 月 2 日	オリエンテーション、キャンパスツアー
9 月 3 日	各ホームステイ先によるイベント
9 月 4 日	各ホームステイ先によるイベント
9 月 5 日	各ホームステイ先によるイベント
9 月 6 日	大学での授業
9 月 7 日	大学での授業
9 月 8 日	大学での授業
9 月 9 日	大学での授業
9 月 10 日	ディズニーランド見学
9 月 11 日	各ホームステイ先によるイベント
9 月 12 日	大学での授業
9 月 13 日	大学での授業、修了式
9 月 14 日	アメリカ出発
9 月 15 日	帰国、解散



図 1 授業風景

## 3. アンケート結果

### 3-1. 参加学生の概要

事前アンケートについては 23 名、事後アンケートについては 24 名からの回答を得られた。

事前アンケートの回答者 23 名のうち、海外での滞在経験のあるものは 9 名（1 週間未満：6 名、1 か月未満：1

## アンケート調査から見た海外短期研修の意義と今後の課題

名、3年未満：1名、3年以上：1名）で、留学経験があるものは0名だった。設問「英語を勉強する理由（複数回答可）」では、「外国語そのものへの興味」が18名、以降多い順に「国際理解・異文化交流」17名、「将来の進学・仕事・就職」11名、「外国語での情報収集・コミュニケーション」9名と続いた。参加したきっかけ（複数回答可）では、「アメリカ（外国）に行けるから」20名、以降多い順に「外国語そのものへの興味」16名「国際理解・異文化交流」16名、「ホームステイ」14名、「語学能力の向上、語学資格取得」11名、「大学案内や学科のパンフレット（入学前）」10名と続いた。COVID-19の影響については、「やや不安である」17名、「あまり不安はない」3名、「とても不安である」2名、「不安はない」1名であった。

事後アンケートの回答者24名のうち、研修の満足度では、「とても楽しかった」が24名であった。設問「アメリカ人（外国人）と話す機会を作る努力」では、「とても努力した」18名、「どちらでもない」4名、「あまり努力していない」2名であった。設問「英語学習の学習意欲（やる気・モチベーション）の変化」では、「学習意欲が増えた」17名、「学習意欲がやや増えた」7名であった。

### 3-2. 事前／事後アンケートの変化

直接的に事前／事後アンケートの項目として、変化のわかる内容について、次のようにまとめた。

#### 3-2-1. 研修への期待度と満足度等

次の項目について、事前にどの程度期待しているかを問い、事後にその満足感やレベル感、見方の変化があったかについてテーマごとに確認した。

- (ア) アメリカ人と交流できること
- (イ) アメリカの大学で学べること
- (ウ) 英語での授業をうけること
- (エ) アメリカの文化や社会を学べること
- (オ) 日本の文化や社会を伝えられること
- (カ) 英語能力が向上すること

事前アンケートとして、(ア)～(カ)の各テーマの期待度を表2に示す。いずれの項目も、概ね「とても期待している」「期待している」のいずれかと回答されており、期待度が高いことがわかる。

事後アンケートとして各テーマの満足感やレベル感、見方の変化の有無について、表3～8に示す。いずれの項目も満足度は高く、授業の英語レベルも高すぎず低すぎず、ちょうどよいと評価され、日本の社会や文化に関する見方についても変化があったと回答されていた。

表2. 各テーマについての期待度

	とても期待している	期待している	あまり期待していない	期待していない
(ア)	21	2	0	0
(イ)	18	5	0	0
(ウ)	18	4	1	0
(エ)	18	5	0	0
(オ)	16	5	2	0
(カ)	11	11	1	0

表3.(ア) アメリカ人と交流できることの満足度

選択肢	回答数	比率
とても満足している	16	66.7%
満足している	8	33.3%
どちらでもない	0	0.0%
あまり満足していない	0	0.0%
満足していない	0	0.0%

表4.(イ) アメリカの大学で学べることの満足度

選択肢	回答数	比率
とても満足している	19	79.2%
満足している	5	20.8%
どちらでもない	0	0.0%
あまり満足していない	0	0.0%
満足していない	0	0.0%

表5.(ウ) 英語授業のレベル

選択肢	回答数	比率
高すぎる	1	4.2%
やや高い	2	8.3%
ちょうどよい	17	70.8%
やや低い	4	16.7%
低すぎる	0	0.0%

表6.(エ) アメリカの文化や社会を学べることの満足度

選択肢	回答数	比率
とても満足している	22	91.7%
満足している	2	8.3%
どちらでもない	0	0.0%
あまり満足していない	0	0.0%
満足していない	0	0.0%

表 7. (オ) 日本の社会や文化に関する見方の変化

選択肢	回答数	比率
とても変わった	9	37.5%
少し変わった	15	62.5%
どちらでもない	0	0.0%
あまり変わらなかった	0	0.0%
変わらなかった	0	0.0%

表 8. (カ) 英語能力の向上に関する自己判断

選択肢	回答数	比率
とても向上した	9	37.5%
向上した	14	58.3%
あまり向上しなかった	1	4.2%
向上しなかった (変わらなかった)	0	0.0%

### 3-2-2. 研修に期待するテーマと満足度等

次の項目について、この項目中で期待する／よかった内容について複数回答可として事前／事後に確認した。各項目に関する事前／事後の調査結果を表 9 に示す。なお、事後の回答数が事前よりも増えた項目に▲を付与した。

- (A) ホストファミリーとの交流
- (B) ホームステイ（アメリカ人家庭での生活）
- (C) アメリカの大学でのキャンパスライフ
- (D) ディズニーランド
- (E) アメリカに行ける（た）こと
- (F) 英語の授業
- (G) 高校訪問（日本語講座のクラスに参加）
- (H) 自由時間
- (I) その他

表 9. 研修に期待するテーマと満足度

選択肢	事前		事後	
	回答数	比率	回答数	比率
(A)	18	78.3%	▲22	91.7%
(B)	17	73.9%	▲24	100.0%
(C)	14	60.9%	▲19	79.2%
(D)	14	60.9%	▲20	83.3%
(E)	12	52.2%	▲21	87.5%
(F)	9	39.1%	▲13	54.2%
(G)*	8	34.8%	0	0.0%
(H)	7	30.4%	▲8	33.3%
(I)	0	0.0%	0	0.0%

\* (G)は、スケジュール等の関係で実施されなかった。

(A)～(F)の項目については、事前アンケートでは期待していなかったが、事後アンケートではよかったと回答する割合が増えており、事前の期待以上の満足度となっていることが確認された。一方で、(G)は実施されなかったため、満足度は 0 となった。

### 3-2-3. 研修で得られる（得られた）と思うもの

次の項目について、事前に得られるものを問い、事後に得られたものについて、上位 3 項目を回答するように調査した。なお、(ぬ)～(を)については、項目内容から事後アンケートのみで選択肢として提示した。各項目に関する事前／事後の調査結果を表 10 に示す。なお、事後の回答数が事前よりも増えた項目に▲を付与した。

- (い) 行動力
- (ろ) 異文化適応力
- (は) 語学力
- (に) 留学経験者という経歴
- (ほ) 向上心
- (へ) 自立心
- (と) 友情
- (ち) 発言力
- (り) 柔軟性
- (ぬ) 無力感
- (る) 挫折感
- (を) なにも得られなかった
- (わ) 上記の選択肢の中にはない

表 10. 研修で得られる（得られた）と思うもの

選択肢	事前		事後	
	回答数	比率	回答数	比率
(い)	17	73.9%	13	54.2%
(ろ)	15	65.2%	▲17	70.8%
(は)	10	43.5%	▲11	45.8%
(に)	10	43.5%	7	29.2%
(ほ)	10	43.5%	▲14	58.3%
(へ)	6	26.1%	4	16.7%
(と)	5	21.7%	▲6	25.0%
(ち)	5	21.7%	4	16.7%
(り)	4	17.4%	▲5	20.8%
(ぬ)	--	--	1	4.2%
(る)	--	--	0	0.0%
(を)	--	--	0	0.0%
(わ)	0	0.0%	0	0.0%

## アンケート調査から見た海外短期研修の意義と今後の課題

(ろ) 異文化適応力、(は) 語学力、(ほ) 向上心、(と) 友情、(り) 柔軟性については、事後アンケートで回答数の増加がみられた。この中でも、(ほ) 向上心の増加割合が大きかった。

### 3-3. 研修期間の妥当性

研修期間の長さについて、事後アンケートにて調査した結果を、表 11. に示す。なお、事後の回答数が事前よりも増えた項目に▲を付与した。

表 11. 研修期間の妥当性

選択肢	事前		事後	
	回答数	比率	回答数	比率
5 日～1 週間	0	0.0%	0	0.0%
10 日程度	1	4.4%	0	0.0%
2 週間程度	8	34.8%	▲13	54.2%
3 週間程度	5	21.7%	5	20.8%
1 か月程度	9	39.1%	6	25.0%

事後アンケートの結果、約半数が現状の日程である 2 週間程度が適当であると回答した。残りの半数は、より長い研修期間が必要と回答した。

### 3-4. 事前／事後研修の必要性

アメリカ研修では研修前の説明会（複数回）のみを実施している。他短大では、事前／事後研修の実施が報告されており、モチベーションを継続するための機会として位置づけている例もある。そこで学生に事前／事後研修の必要性があるかを事後アンケートとして確認した。その結果を表 12～13 に示す。アンケートの結果、半数以上の学生が事前／事後研修の両方をあったほうがよいと回答した。

表 12. 事前研修の必要性

選択肢	回答数	比率
あったほうがよい	12	50.0%
なくてよい	6	25.0%
どちらでもない	6	25.0%

表 13. 事後研修の必要性

選択肢	回答数	比率
あったほうがよい	13	54.2%
どちらでもない	7	29.2%
なくてよい	4	16.7%

### 3-5. その他

事前アンケートの回答で、研修に参加するにあたって、保護者の理解度については、「すぐに理解してくれた」16 名、「親から勧められた」4 名、「時間がかかったが、理解してくれた」3 名であった。

事後アンケートの回答で、設問「アメリカ研修がオンラインによる研修だった場合の参加」については、「参加する」4 名、「参加しない」20 名であった。英語による海外研修の国や地域（複数回答可）では「アメリカ合衆国」が 23 名、以降多い順に「カナダ」15 名、「オーストラリア」15 名、「イギリス」11 名、「ニュージーランド」8 名と続いた。

事前／事後アンケートの自由記述欄に、「国際文化学科の学生も参加できることをもう少し早く決めてお知らせしてほしいかったです。費用の準備がぎりぎりだったため。」とあった。これについては、迅速な対応が出来ていない国際文化学科の体制や事前準備の問題がある。また、今回は英語英文学科と国際文化学科の実施であったが、両学科の連携が不十分であった。さらに、上記に関連して、学科の支援・対応および、責任体制については、対症療法的であったり、現場任せの対応になってしまうなど、体系立てられていない部分が散見された。事前準備や責任体制も含めて今後解決すべき課題である。

また、「高額ではあったがそれだけの価値があったし、とても有意義だった。」といった意見もあった。今回の研修は、約 2 週間で 50 万円程度の負担であった。なお、2022 年 6 月 1 日のアメリカドル／日本円の中心相場は 128.92 円、2022 年 9 月 1 日のアメリカドル／日本円の中心相場は 139.50 円、2022 年 9 月 15 日のアメリカドル／日本円の中心相場は 143.25 円であった（日本銀行金融市場局、外国為替市況（日次））。

さらに、「ふたりでホームステイだとしても日本語を話してしまいがちになる。」「一家庭一人がいいと思う。」と 2 名 1 組のホームステイの在り方について、今後検討する必要がある。

## 4. 今後の課題

### 4-1. 海外短期研修に関する課題

事前／事後アンケート調査の結果、アメリカ研修に対する期待度・満足度および学習効果は概ね高いことがわかる。特に、双方を比べると実施後の満足度が期待を大きく上回ったことが明確である（実施できなかった高校訪問を除く）。また、参加者の多数が、日本の社会や文化に関する見方の変化を実感している。これは異文化に直接接することによって、深い教養や、他者を理解、許容する視点を獲



得できたことを意味し、英語英文学科および国際文化学科の教育目標と合致するものである。この結果は、海外短期研修の実施の妥当性を証明するものである。

2022 年度の海外短期研修はアメリカ合衆国のみで行われたが、従来国際文化学科では海外言語・文化演習として、中国語圏研修（2004～2019 年度）および韓国研修（2000～2019 年度）を実施してきた。しかしこれらは 2020 年度以降、COVID-19 で中止を余儀なくされてきた。アメリカ研修の学習効果が高いことを考慮すれば、研修先の拡大も前向きに検討すべきだと思われる。これに関連して、105 分授業や 100 分授業の導入によって授業期間を短縮し、海外短期研修や課題解決型学習（PBL, Project Based Learning）等の時間を確保することで、各種研修や学習の選択肢の幅をひろげるなど、より多くの学生が海外短期研修に参加しやすい環境を整備していくことも検討する必要がある。

いくつかの課題もある。海外短期研修による語学学習や異文化理解へのモチベーション向上がはっきりと見られたわけであるが、そのモチベーションをさらに向上、維持させるような事前／事後研修を実施する余地がある。アンケート調査の事前／事後研修の必要性の結果（表 12、13）や学習の継続性、連続性を持たせられるように、海外短期研修前後に、事前／事後研修や海外短期研修に連動した講義などを行うことで、より高い学習効果が得られると思われる。これは、海外研修への参加を躊躇させるようなものであってはならず、参加者の興味関心を高め、モチベーションを維持するための工夫が必要である。また、COVID-19 や人生 100 年時代など、人々の意識や社会のあり方が大きく変化しつつある。加えて、数理・データサイエンスや人工知能(AI)が注目されるなど、国際的な視点とともに、科学分野からのアプローチも欠かせない時代になっている（松浦・高田・平田 2015）。一方、岐阜市立女子短期大学におけるアメリカでの海外短期研修では、研修実施場所は変化しているものの、研修内容が海外英語演習を始めた当初の内容と殆ど変化がない。そのため、海外短期研修で行う内容を、時代や学生のニーズに合わせた見直しが必要である。

#### 4-2. 人材育成に関する課題

グローバル人材やグローバルから想起される人材の定義は、各企業や大学において異なるが、グローバル人材グローバル人材育成推進会議において、要素Ⅰ～Ⅲを満たす人材をグローバル人材として定義している（グローバル人材育成推進会議 2011）。要素Ⅰは語学力・コミュニケーション能力、要素Ⅱは主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、要素Ⅲは異文化に対する

理解と日本人としてのアイデンティティ、である。また、筆頭筆者のグローバル人材育成に関する駐在員等への調査研究の結果、グローバル社会で働くうえで必要とされる能力やスキルは、語学力、コミュニケーション能力、環境適応力、好奇心、柔軟性、精神力であった（松浦 2014a、松浦 2014b）。一方で、「IT スキルや語学力といったスキルは、すでにグローバルで働く上で前提となる能力である。海外に出たいという意欲や言語スキルを向上する努力の維持、高い積極性を備えることがグローバル人材に求められている。」（松浦 2014b）と報告しており、今後これらを涵養することが必要となってくる。

以上の視点から、今回のアメリカ研修の内容やアンケート結果を踏まえる。今回のアメリカ研修で得られたと思う能力については、「異文化適応力」が最も多く、その後、「向上心」、「行動力」、「語学力」と続く。今回のアンケート調査では、「環境適応力」や「好奇心」、「精神力」といった項目がなかったため、十分な分析は出来ないが、今回のアメリカ研修が、人材育成として一定の効果があったと見込まれる。

海外短期研修における人材育成の方法の一つとして、海外で実際に働いている方の話を聞くことも、異文化理解やキャリアパスについて学習できる機会になると思われる。また、事前研修において海外短期研修での各自のテーマ設定や、海外短期研修中には、前述の要素Ⅰ～Ⅲに関する自己評価各自のテーマに関する資料収集・発見に関する記録を行うことや、テーマに関するレポート作成、そして、これらにつながる事前／事後研修を行うことで、グローバル人材の育成に資する海外短期研修になるだろう。

#### 4-3. その他の課題

事後アンケートの自由記述欄に、研修参加費用が「高額」という指摘があった。これはとりわけ、為替相場の現況およびアメリカにおける物価上昇によって拍車をかけられ、授業料や滞在費も高騰した。為替および物価の動向を予測することは困難であるが、研修にかかる費用は常に参加希望者にとっての懸念事項であることを考慮する必要がある。

#### 5. おわりに

本稿では、アメリカ研修の実施内容を記録し、アメリカ研修前後に行ったアンケート結果をまとめた。アンケート結果からは、事前の大きな期待があり、事後には期待を上回る満足が示される等、結果は全体的に良好であった。一方で、他短大で実施されるような、事前／事後研修について、半数の学生があったほうがよいとの回答もあり、異文

アンケート調査から見た海外短期研修の意義と今後の課題

化理解の促進や学習モチベーションの維持を目的として、さらに深い研修意義とするための方策として検討の余地があると考えられる。

今後、アメリカ研修の事後（1 か月後）・事後（3 か月後）アンケートを行う予定である。これにより、英語学習に関するモチベーションなどについて調査を行うことで、事後研修などに関する検討を行っていく。これらのアンケート結果については、追って報告する。

『岐阜市立女子短期大学研究紀要』 44 (1994): 7-14

吉田恒義、山本健一「大学英語教育における国際交流の理論と実践」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』 52 (2003): 11-33

（提出日 令和 4 年 9 月 30 日）

## 参考文献

グローバル人材育成推進会議「グローバル人材育成推進会議中間まとめ」（2011）

今悠恭、小森雄太、松浦康之「オンライン交流による外国語および外国文化の学習意欲向上に関する基礎的研究—岐阜市立女子短期大学とプリンス・オブ・ソンクラー大学による取り組みを事例にして—」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』 70 (2021a) : 1-7

今悠恭、小森雄太、松浦康之「オンライン国際交流による異文化交流と学習意欲向上の取り組み」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』 71 (2021b): 15-20

日本銀行金融市場局、外国為替市況（日次）

<https://www.boj.or.jp/statistics/market/forex/fxdaily/fxlist/index.htm/>

松浦康之「海外展開型産業人材育成プログラムの構築について—異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティの視点から考察—」『グローバル産業人材育成プログラムの構築調査報告書(2011-2013 年度)』、福井大学、2014a: 68-77

松浦康之「日本へのメディカルツーリズムの導入可能性の検討と日本人アイデンティティの視点からのグローバル人材育成の考察」『イマジニア養成キャリア開発プログラム（CDPIT）CCDS キャリア教育平成 25 年度 4 月期学外研修報告集』、福井大学、2014b: 25-40

松浦康之、高田宗樹、平田隆幸「国際的視点に立った福井県における高大連携数理教育の検討と実践」『福井大学大学院工学研究科研究報告』 63 (2015): 55-61

山本健一、吉田恒義「短期大学英語教育に関する学生意識の総合的研究（Ⅳ）：海外英語演習について その 1」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』 43 (1993): 1-8

山本健一、吉田恒義、大橋真由美「大学英語教育的視点からの異文化交流の試み：異文化交流科目：海外英語演習について」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』 53 (2004): 29-34

吉田恒義、山本健一「短期大学英語教育に関する学生意識の総合的研究（Ⅳ）：海外英語演習について その 2」